

令和元年6月26日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07168

研究課題名（和文）サイレント期の日本の映画館における音楽文化の研究：松竹系列館を中心とした地域比較

研究課題名（英文）A Study of Music Culture in Japanese Movie Theaters: Regional Investigation of Shochiku Movie Theater Chain

研究代表者

柴田 康太郎 (SHIBATA, Kotaro)

早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館・研究助手

研究者番号：00801060

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 600,000円

研究成果の概要（和文）：サイレント映画の最盛期である1920年代の映画館のなかには、映画上映を行うだけでなく、洋画上映にくわえて歌劇や舞踊などの上演を組み合わせた独特の興行を行うものがあった。本研究はこうした複合的な興行実践を継続的に行った松竹座チェーンに注目し、1920年代の日本国内における現在と異なる映画興行の実態を検証するものである。道頓堀松竹座の開館した1923年と、浅草松竹座での映画興行が始まった1928年という二つの時期を軸として東京と大阪の映画興行のあり方を調査することにより、映画興行・音楽文化の地域差と変容、および変容の複数の背景を浮かび上がらせた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の映画体験と異なり、かつての映画館は時に映画の上映とともに歌劇や舞踊などの実演による舞台上演によって観客を引きつけていた。本研究は、1920年代にこうした独特の映画興行を継続的に展開した松竹座チェーンに注目することで、映画上映と舞台上演を複合的に興行した実態とその実践の背景や影響に光を当てた。これによって、戦前の映画文化が映画上映だけにとどまらない多様な意味連関のなかで形成されていたことを示すとともに、映画館が映画にとどまらない多面的な近代的文化体験の一大拠点になっていたことを浮かび上がらせた。

研究成果の概要（英文）：In the 1920s, there were movie theaters that exhibited not only films but also held live stage performances such as operetta and dances. This study investigated combinatory exhibition practices as such in Japan during the 1920s by concentrating on the cases of Shochiku-za chain theaters, especially those of 1923 when Osaka Shochiku-za was founded as well as those of 1928 when Asakusa Shochikuza in Tokyo began film and stage exhibitions under the influence of Osaka Shochiku-za. Through this investigation, it examined the regional differences of the exhibition practices between Osaka and Tokyo and the interrelationship of those regional practices.

研究分野：音楽学、映画学

キーワード：松竹座 映画館 サイレント映画 少女歌劇

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) サイレント映画の黄金期、映画館は時に音楽会場としての性格さえもつ音楽文化の拠点のひとつであった。伴奏音楽が生演奏で演奏され、映画上映の間には余興として音楽演奏も行われていたからである。欧米の映画館の音楽・音響文化をめぐる先行研究としては既に、Altman (2004)、Brown & Davison (2012)、Tieber & Windisch (2014) 等があり、映画という新しいメディアとともにヴォードヴィル、ミュージックホール、見世物、オペレッタ、ダンス等の多様な文化実践が再編成された諸相に様々な観点から考察がくわえられている。これに対し、日本の映画上映空間における音楽文化の研究は、資料不足や映画学と音楽学の境界事例という性格から、各映画館での具体的な実態や展開が明らかにされてこなかった。

(2) もっとも近年は、今田 (2000)、Hosokawa (2014)、白井 (2016)、白井 (2017) などによってこうした状況の打開が始まり、本研究の代表者である柴田も、従来あまり検討されてこなかった楽譜資料、および映画館プログラムや各種雑誌・新聞等の文献資料の分析を行い、特に東京の映画館における音楽文化の諸相を明らかにしてきた。本研究に関わるものとしては特に、1920 年前後の浅草では管弦楽に関心が高まるなか、映画館では、伴奏音楽と音楽アトラクションを独特のかたちで関連づけるような独特の音楽実践/音楽受容が形成されていたこと、また浅草と赤坂・銀座という同じ地域の中での影響関係があったことを示している。また松竹の実践についても既に、松竹が東京の映画館での管弦楽団が大型化する契機になったことや、歌唱や琵琶等の音楽アトラクションを映画で再編成するかのように小唄映画や琵琶映画等の「音楽映画」を製作していたことを明らかにした。

(3) しかし東京の事例に関するこれまでの調査のなかで、次第に関西には関東と異なる映画館の音楽文化があったことが浮かび上がってきた。むろん既に、日本映画の興行空間における地域差については上田学 (2012) が映画草創期の東京と京都の映画館の差異を検証しているほか、笹川慶子 (2018) が大阪の事例研究を進めている。また、映画を離れば音楽観客の間でも関西と関東では芸術志向で差異があることが指摘されており、渡辺 (2002) は西洋音楽受容の態度の地域差を示している。では、具体的な映画興行のなかで地域差はどのように現われ、また時代の推移のなかでどのように関係していたのか。本研究はこの問いに答えるべく、映画上演と歌劇上演を組み合わせた独自の興行実践を大阪で開始した松竹座に注目し、これが関東の映画興行界に参入した際、どのような影響を及ぼしたのかを考察するものである。松竹座を中心に周辺の映画館の事例を考察することで、1920 年代の日本国内における音楽文化の地域差と地域間の関係性を浮かび上がらせる。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究ではまず、1920 年代の道頓堀松竹座と浅草松竹座の事例を通して、映画館で映画とともに上演された歌劇や舞踊等の実演演目の実態解明を図った。また、映画館プログラムや新聞広告の分析を通じて、こうした上演がどのような企てとして映画館側から提示され、また観客がどのように受容していたのかを可能なかぎり具体的に捉えることを試みた。道頓堀松竹座と浅草松竹座における映画上映と実演演目の上演の実践を軸としつつ、その周辺の映画館の実践を併せて考察することで、映画興行における関西と関東の地域差を捉え、さらに通年変化を考察することで地域間での影響関係をも浮かび上がらせることを目指した。

### 3. 研究の方法

(1) 東京と大阪の映画館における興行実態を捉えるべく、本研究では中心的な調査対象として 先行研究で十分な検討がなされてこなかった映画館プログラム (各映画館で毎週配布された簡易パンフレット)、東京の芸能情報に関する通信社である日刊の『東京演芸通信』、松竹関連雑誌などの同時代の雑誌・新聞の 3 種を設定した。特に や は現存資料が限られているため、文献調査は国立映画アーカイブ、早稲田大学演劇博物館を中心としつつ、山梨県立図書館における梅村紫声文庫、太田市立新田図書館における田中純一郎旧蔵資料、立命館大学国際平和ミュージアムなどの所蔵資料を調査し、関東・関西都市の映画館プログラム、関連雑誌の閲覧を進めた。

(2) 考察に際しては、映画興行における松竹座の発端となる道頓堀松竹座が開場した 1923 年 5 月、および大阪松竹合名社の松竹座チェーンが東京の浅草松竹座に進出した 1928 年 8 月という二つの時期に注目することで、より効果的な地域間の差異と影響関係の検証を試みた。もっとも当初の計画では、東京の映画館の興行実践は『東京演芸通信』の目録化によって実態把握を図ることを想定していたが、調査の過程で、1920 年代後半の事例については対象の質と量の変化をふまえて目録化より閲覧調査を優先することとした。

(3) また本研究では、映画館で上演された実践を捉えるうえで、道頓堀松竹座および浅草松竹座に設置された松竹楽劇部を考察対象とした。ただし、大正期に流行した少女歌劇のひとつとして成立した松竹楽劇部は、松竹座の興行にとって枢要な存在であるものの、質量ともに松竹楽劇部以外の河合舞踊団やタカタ舞踊団など外部団体も重要な存在であったことが分かって

きた。そのため本研究では、少女歌劇の延長に位置する楽劇部の実践を捉えることにくわえ、映画館における舞踊やレビュー等の音楽に止まらない幅広い舞台パフォーマンスの実態解明を考察に含め、より広く映画とそれ以外の実践との関わりに注意を配って検証を進めた。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究は、上述の二つの時期の前後に注目して、道頓堀と浅草における松竹座の興行実践、およびその周辺の興行実態を考察した。まず広く映画館プログラムを調査した結果、1910年代など旧来の映画館では寄席の文化の延長上に余興として義太夫、琵琶、音楽、舞踊などが行われていたこと、またこうした実践は1920年代に入ると次第に変容し、映画館の映画以外の実践としては管弦楽演奏が一般化していたことを確認した。これは大正期の東京・大阪・神戸の映画館プログラム、1920年代前半の『東京演芸通信』でも確認され、東京でも大阪でも1920年代前半の映画館興行では管弦楽演奏が規範化していたことが分かった。ただし、関東の映画館プログラムと比較すると、関西の映画館プログラムには琵琶演奏等の情報も多く掲載されており、両地域の間の緩やかな差異も浮かび上がってきた。

(2) こうした1920年代前半の映画館の事例をめぐる調査によって、1923年の道頓堀松竹座が、洋画専門館でありながら管弦楽部のみならず楽劇部を設置し、映画上映と少女歌劇の公演を組み合わせる興行したことの特殊性を捉えることができた。しかし周辺調査の過程で、関東大震災後の1924年に再開場した、やはり松竹系列である木挽町歌舞伎座には、映画の映写装置が取り付けられて歌舞伎上演とともに映画上映が行われており、常設映画館外での実演と映画の複合的興行も多様なかたちで進められていたことも浮かび上がってきた。映画館外の実践については更なる研究が必要であるが、道頓堀松竹座の映画館としての特異性とともに、映画館としてよりも劇場としての同時代性が確認された。こうした1910年代から1920年代前半までの関東・関西の映画館での映画興行と音楽実践の多様性をふまえた考察については、2018年12月の日仏会館でのシンポジウムや2019年3月にカリフォルニア大学ロサンゼルス校で行われたシンポジウムで発表した。

(3) 次に、浅草に松竹座チェーンが進出した1928年前後を軸とする研究を行った。関東の映画館におけるアトラクション上演は、浅草松竹座が映画と実演の複合興行を行う前の1927年には既に、丸の内邦楽座がパラマウント社直営となったことでアメリカ流の高級映画館の実践として試みられ始めていたことが分かった。この折には管弦楽演奏に山田耕作が指揮に迎えられ、アトラクションにはブロードウェイから劇団が招聘されて、評判となっていた。しかし改めて調査してみると、関東の主要な洋画上映館でのアトラクションの定着・普及が進んだのは、大阪を拠点とする松竹座チェーンが東京に進出した後の1929年初頭頃からであり、新宿武蔵野館や浅草電気館ではヴォードヴィルやレビューが試みられるようになっていたことが確認された。この背景には松竹座の東京進出により洋画配給地図が変容し、興行上の競争が活発化していたことがあると考えられる。もっとも、関西からの興行実践の伝播のほかにも、道頓堀松竹座で演奏していた井田一郎が関東に移って関東でのジャズ演奏を本格化させる機運を作るなど、レビュー以外にも様々なかたちで関西と関東の文化交流があったことが分かった。こうした多角的な1920年代末の実演アトラクションの流行やジャズ音楽の流通については、1929年1月の早稲田大学におけるシンポジウムで発表し、後に松竹座で榎本健一劇団の楽長として演奏を担当した栗原重一の事例を切り口に考察した。

(4) 本研究では、こうした松竹座チェーンを基軸とする映画配給網の分析にくわえ、地方都市における松竹系列館と東京の松竹直営館の関係を調査した。具体的には、まとまった九州の映画館興行資料である「鶴田コレクション」(早稲田大学演劇博物館所蔵)の分析機会を得て、同地の中心的な松竹系列の映画館だった熊本電気館の興行記録を考察した。熊本電気館と松竹映画の封切館である浅草帝国館・浅草電気館との比較により、映画文化の流通は浅草で作曲された楽曲もふくめて多方面にわたることが明らかになった。この考察は、2018年9月に熊本県八千代座で開催されたシンポジウムで発表し、江戸期から昭和初期までの演劇や映画をめぐる地方都市における文化流通をめぐる議論のなかで松竹系列の映画館の実践を捉え、映画をとりまく芸能・芸術実践の流通の複層性を浮かび上がらせた。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

柴田 康太郎、1920年代後半の時代劇映画における音楽伴奏の折衷性：和洋合奏・選曲・新作曲、音楽学、査読有、2018、1-16.

[学会発表](計6件)

Kotaro SHIBATA, Various Standardizations of Film Sound/Music Practice in Japanese Movie Theaters during the 1910-20s, Talking Silents: New Approaches to Early Japanese Cinema and the Art of the Benshi, University of California, Los Angeles,

2019.3.2.

柴田 康太郎、栗原重一と映画館の音楽、公開研究会 エノケンの楽団と舞台・映画・レコード：栗原重一旧蔵楽譜から考える、早稲田大学、2019.1.30.

柴田 康太郎、戦前の日本映画における琵琶と浪曲、シンポジウム 日本映画と語り物の文化、早稲田大学、2018.12.15.

柴田 康太郎、1910年代の日本における映画館の音、国際シンポジウム 声、動作、音楽：サイレント時代のフランスと日本における映画上映、日仏会館、2018.12.8.

柴田 康太郎、サイレント時代の日本の映画音楽：熊本／九州の映画館における音楽風景、シンポジウム 大正期の映画と演劇の劇場風景、熊本県八千代座、2018.9.1.

柴田 康太郎、1920年代の日本における琵琶映画と小唄映画の興行、日本音楽学会第68回全国大会、2017.10.28.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。